同様伏見・宇治間の舟運を記載してある。故に當時の巨椋池は、宇治・小倉・伏見・淀方面まで一連の湖水で其中に島や洲が多く茲んでゐたと見るのは、眞に近いやうである。

伊勢に於ける輪中地域の地誌（一）

辻井浩太郎

目次

一、序言
二、特殊景觀の概說
三、土地の開發と景觀の變遷
四、景觀構成要素の分析
1、堤塘と溝渠
2、聚落
3、民家
4、飲料水
5、土地利用
五、人口
六、結語
（參考文獻）

一、序言

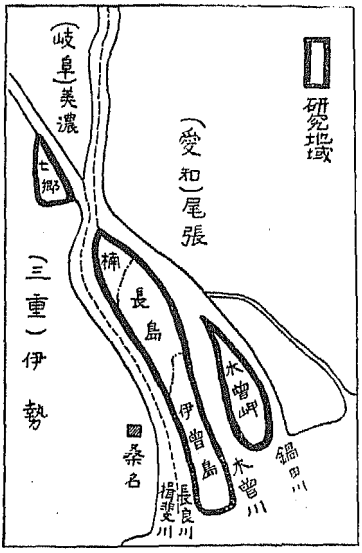
三重縣の北端即ち伊勢・尾張・美濃の三國相接するの地は、伊勢海と敦賀灣を連ぬる地質構造上の横斷坼裂線に當り、地形學的には斷層窪地の一部をなしてゐるため、濃尾平野を流るる木曾・長良・揖斐の三大川はここに集つて伊勢海に注いでゐる。而して此の河口につくる低平卑濕の三角洲は、古來大洪水頻發の地で、西濃平野の南に續く輪中地域として特殊の景觀を持つてゐる。

輪中に就いては、最近別技篤彥學士が地理論

叢(第一輯)に「西濃平野に於ける輪中の地理學的考察」としてその研究を發表された。その他一・二の發表もあるが何れも西濃平野に於ける輪中の研究が主である。

本稿は伊勢に於ける輪中のみをその對象とする。勿論西濃の輪中地域と共通する幾多の景觀をもつてゐるのであるが、本地域の大半は三角洲の先端地域であり、その生成が最も若く、新田開拓が最も新しく、或は河川改修のため水平的延長に變化があつたことなどにより、多少異つた景觀を呈してゐるので、記述を試み諸先生の御批正を仰ぐ次第である。

第一圖　研究地域



第一圖は研究地域を示す。七郷輪中(七郷村の大部)は改修後河川に圍繞されてゐないが景觀は昔の輪中そのままである。(陸測二萬五千、彌富、桑名兩圖幅を參照されたい)。

二、特殊景觀の概說

西濃輪中では川幅が比較的狹いため、川島も島と云ふ感が極めて薄いが、河口附近になると、其幅も愈々廣く、長島には省線の驛があるが、何れの村も渡船を利用しなければ渡ることが出來ぬ程で、長島・伊曾島と名の如く島といふ感じが殊に深い。

これらの島は高い城壁の如き大堤防に圍まれ民家はその內側に高く點々と線狀村落をなしてゐる。輪中內の低地は殆んど水面以下の田で、春は菜種の黃と紫雲英の紫、夏は一面の綠、秋

は全面黄金の波を寄せ、その間細く光る水面を見せて縱横に流るる大小の溝渠、池沼幾百これを行く小舟あり、高く盛土したる民家の一列に竝ぶ處あれば必ずこれに沿ふ水濠あり、小舟の繫がれるあり、板橋の高く懸れるあり、麗しき蓮の花の咲く池の續くありて、實に水鄉の地、日本の Nederland である。而して輪中は日本の Polder とも稱すべきもので、別技氏は輪中と Polder が種々の點で酷似せることを詳說されてゐる。(二)

されば(三)かの蘭人シーボルトが此の地を過ぎたる時の紀行文の一節に

川床は兩堤防の間にありて稻田より高し。余は旅行中屢々河川の兩側にいと高く積み上げたる堤防を見たるが、それは旱魃の來るとき稻田の灌漑のためにするよりは、雨期又は天候惡しき時の氾濫に備ふるなり。眞直にして平行する綠の堤防には樹々を植込みて、人をして和蘭の運河を思ひ出でしむ。概してこの地方は和蘭の平濶にして運河に貫穿されたる地方と共通なること多し。余は備に此の母國に似たる平野に於てかくも疲れたる旅行中我に研究のため十分の安意を與へざりしを遺憾としたり

と。

幅廣き堤防道路の上を行けば、洋々たる木曾の流れ、滿々たる長良・揖斐の水面と、蜿蜒たる堤防の果てが遠く伊勢の海面と共に水平線上に融合するのあたり、濶達雄大全く日本放れをした眺めである。

三、土地の開發と景觀の變遷

1. 德川以前

往時の海岸線は現今より餘程內陸に入つてゐたらしく、日本武尊が東征の往路、孤松の下に御劒を遺し給へる尾津の崎(現多度山麓の戶津の地か)附近に船着の祠・碇塚の稱ある地のあること、又尊の御詠に「尾張に直に向へる尾津の崎なる一つ松」(四)とあるによりても、或はこの附近に散在する貝塚の分布などより、當時この地は海中か又は極めて卑濕の海中の洲なりしものと思はれる。

此の地に關する最古の地圖は、尾張玉井神社所藏のもの(孝靈天皇時代のものと傳ふ)次は同猿投神社の養老年間のものと稱せられるものである。兩圖とも長

島・桑名・富田は何れも島となつてゐるが、前圖は餘程後世の大洪水の時の圖であるらしく、又後圖の如く長島が養老年間既に成立してゐたかに就いては吉田東伍氏の「美濃尾張平原の變に就いて」及び大日本地名辭書、牧野信之助氏著「武家時代社會の研究」等によれば信ずることは出來ぬ。

揖斐川の右岸多度山麓及その附近は古代より多くの聚落發達し、その後漸次海岸近く迄住民も進出し、嵯峨天皇弘仁三年五月「桑名郡榎撫驛（朝明村？）から尾張に達する水路尙驛馬を置き常に民勞を致す。」（類聚國史）とあるから王朝時代には桑名から尾張へ渡る渡しがあり、兩國の間には川を挾んで交通路が、上古時代より餘程南下してゐたものと思はれる。

かく對岸の兩國には已に聚落發達し、又交通線上に當つてゐたにかかはらず、此の地に聚落の發達を見なかつたのは、三角洲の生成新しく極めて卑濕で且つ洪水の患が多かつたためである。然るに一方人口の增加に伴ふ耕地の必要は土地極めて肥沃で交通便利なこの低地に及び、鎌倉時代に至りて初めて開拓移住が行はれたやうである。

即ち此の地域には延喜式内に列する神社はもとより無く、最古の社寺は長島坂手山大通院（改修後川底となる）開基は建保年間、神社は長島西外面の八幡社の創祀寛元三年である。移住の最初、新田開發の最古の年代を知る文獻は見當らない。

長島は最初市江と稱し、附近一帯の地は河內野の別名を以て稱されてゐた。其の後室町時代となつて開發も進み住民も相當あつた事は、此の地の杉江は香取鄕杉江として、その名も見えてゐるし、松ノ木・上逆手・下逆手（現坂手に作る）の名が東鑑の中の香取五箇鄕に見えてゐたり、或は本願寺の證如上人の日記（天文七年十二月十三日の狀）によりても證せられる。然しこれらは何れも北部のみであつた。

當時は分流多く洲も小さく數個に分れてゐた

長島の如きも最初小洲七つより成り名づけて七島と呼び長島と訛つたと傳へられる程で、最初數個の小洲なりし事は、長島古繪圖（時代不詳）に明らかに出てをり、現在その時の分流に一致する舊河道の存在で證せられる。

而してその所屬は最初木曾川沿岸は尾張に、長良川揖斐川沿岸は伊勢に、前者の村は八劒の神を祀り、後者の村は神明社を祀つてゐた。この奉祀する祭神を異にすることから兩對岸尾張と伊勢より移住したものと思はれる。

其の後戰國時代になつて此の地特殊の位置から軍事的に利用され南部に更に住氏が多く集つたのである。長島城は寛元年間の創建と傳へられるが、この時代になり規模も大に築城されたのである。

此地東西北有川、從濃州流出、（中略）數川湊爲洪流、廻長島、其南滄海渺茫焉、凶惡僧徒據是要害地、賊徒奸民群棄居之、而廢僧律耽遊宴、築數塁以扞禦。（織田眞記）

の如くこの地形を利用し一向宗徒の亂が起つたのである。その他この地が軍事的價値のあつた事は、それ以前海賊がここに據つて居た事でわかる。勢州軍記卷上に「爰北伊勢長島近邊嶋々之海賊屬之、抱難所發一揆」とある。

宗亂後此の地には尙暫らく瀧川一益の占據により動亂は繰返され、德川の治世に到る迄は依然軍略上の重要地點として存在し、長島城の修築を見る等のことはあるも、開墾事業等に着手する餘裕は見出されなかつたのであらう。

2. 新田開發

慶長六年菅沼氏城主となる頃も、まだ小洲は相離れてゐたが、德川時代に入り開拓が始まり元和九年城主松平定勝の時、十數箇に散在した小曲輪は干拓築堤して一の輪中としての形態を具へることになり、長島輪中と呼ぶ複合輪中を形成した。而して爾後の開發にかかる地を新田と呼ぶに對し、この地には小新田を除く外、新田の名を附しない。

當時はその南部に砂洲の堆積著しく開墾の容

易であつたのと、兵燹おさまつて、開墾事業が全國的に盛んとなり、人口增加に對する耕地の開拓は水害多き危險地までにも進出して來たのである。

新田開發は元和、寛永に始まり、承應・寛文年間に多く、降つて貞享・元祿と漸次南進し、文政年間に南端に達して、三角洲の先端新田の干拓終り、更に明治に入りて新田の再築、小部分の開拓及び池沼廢川等の耕地化があつた。

大小數十に及ぶ新田の開發は藩主及び家臣等の手になるもの極めて少なく、領內の農夫や尾張・美濃・三河の移住農夫による共同或は單獨開墾であつた。新田名も主に親村の名と開拓者の名を附したるもの多く、中には雁ヶ地—雁ヶ地新田—雁ヶ地脇新田又は雁ヶ地附新田。見入—見入新田—見入小新田の如く、親村・子村・孫村を示すものもある。

ここに於て長島輪中の南の河中に散在する葦に覆はれた不毛の砂洲は四つの大輪中となり、（第四圖(一)(二)(三)）、自然の暴威を逃がれんとする高き堤防をもつ住所と耕地とが出現して自然景觀はここに初めて輪中といふ特殊の文化景觀を呈することになつた。七郷輪中の開發もこれらと相前後してなされてゐる。

此の自然の征服や全く一通りの苦心努力で出來るものでない。干拓するには先づ潮留の堤防を築かなければならぬ。築戸といふ地名はこれをよく現はしてゐる。輪中の外側に新しく堆積する砂洲を漸次干拓して行つた。かかる小新田は外面（ドモ）又は前（マエ）と呼んでゐる。例へば三日外面、西外面、前新田、嘉七前、築戸前、孫右衞門前の如きものがあり、三日間或は十日間に干拓した小新田は三日新田、三日外面、十日外面として殘つてゐる。川中の洲を開墾せしものに又七川田、新川田あり、長十郎起、甚兵衞起（オコシ）の起は開墾の意で、土の少ない輪中では土を供給した處に土取の地名さへ生じた。

その他この地域には三角洲として一般的な

島・岬・洲の字のつく地名多く、或は遠淺、葭ヶ須、築出の如きものがある。以上のほかにも田中啓爾先生の十六島地方の「殆んど凡ての地名の語尾はこの景觀に即してゐる」(一一)如き地名が多い。

輪中の地割は新地開墾だけあつて整然たるものがある。イの割、一番割、いろはの割、山の割、畑の割、飛び割、六畝割等から、五百坪、三百坪、八十歩、三番縄、長縄、大縄などの地名が地割に關係して殘つてゐる。

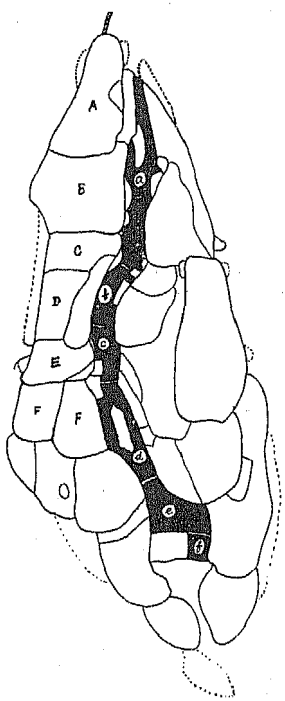
これら輪中の水難は慘害言語に絶するものでここには記すことを略するが、三角洲の先端地域は西濃輪中よりその災害は一層甚だしいものであつた。洪水・潮切・暴浪・津浪・地震堤切沒入・浸水・氾濫等である。

何れの輪中も神社の密度は寺院よりも大で開拓の日の淺いことと我が民族性をよく現はしてゐる。特に多いのは水難地であるからで、例へば長島村は神社二〇寺院一三。木曾岬村は神社二二寺院一〇、合祀前は堤防の先端に水難除としてあつたものが多い。

(神社數は合祀前。長島は歴史的に寺院の多い村である)

田中啓爾先生は十六島地方で、開墾が各部落の人によつて年代を經て別に進捗した爲に各字の飛地が交錯して存在してゐることを記されてゐるが、(一二)ここにもこれと同樣のことがある。而も共に水郷地である。

即ち木曾岬村には第二圖の如く、各字の飛地



第二圖　代地（新田の分布）

が代地（ダイチ）の名のもとに存在し、輪中特殊の開拓過程を知るに足る興味深いものがある。

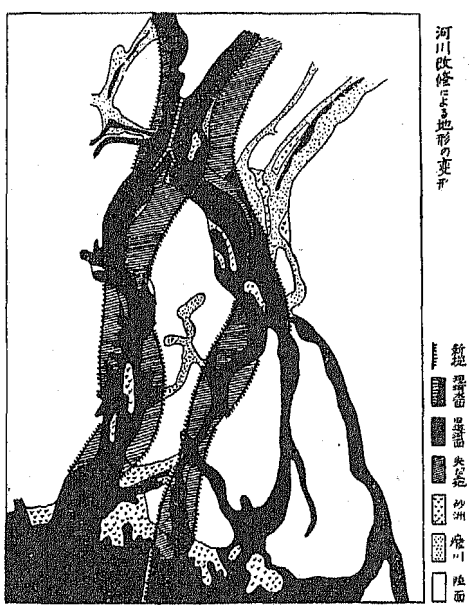
圖に於て黑色の部は代地と稱する子或は孫新田である。a・b・c・d・e・f の代地小新田はA・B・C・D・E・F の親新田に對して、夫々飛地となつてゐる。例へばAは加路戸新田、aは加路戸代地の如く呼ぶ。これは輪中堤築留（ツキドメ）のため或は昔改修等のため外側で失つた土地の代償として內部の以前川であつた處に新らしい土地を與へられ新田を開發したものである。それ故この代地を連續せる中央の帶狀の地域は舊河道をうまく表現してゐる。

3. 河川改修

輪中が形成せられ堤防が高くめぐらされても對岸尾張の所謂御圍堤以上の高さにすることは許されぬため伊勢に屬する輪中は西濃と共に洪水からまぬがれることは出來なかつた。ここに於て河川改修が行はれたのである。

改修工事で有名なのは薩摩藩の寶曆治水であるが、その他にも改修のため地形の變遷したるもの多く、尾張徇行記に、梶島輪中を述ぶるに當り「往古はこの梶島大いなる島にして市江島（今の長島）と續きゐたりしが、佐屋川掘り替りてのち小さくなれり、古へは木曾川今の善太新田の方に流る。古今地形大いに變れり云々」と見えて

第三圖　河川改修による地形の變化



ゐる。

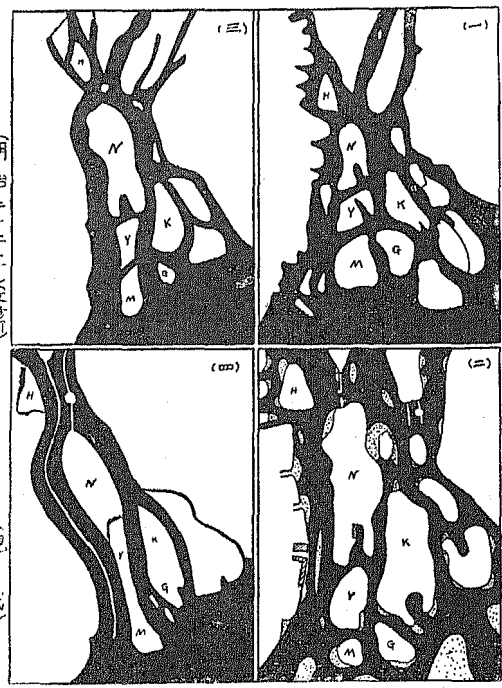
寶暦治水中の最難所油島洗堰の工事により、三川分流の基礎がなり、その下流の水難は大いに緩和されたが勿論完全なものでなかつた。

其の後下流一帶の洪水を永久的に防ぐ目的のもとに、三川分流を主眼として、明治十六年内務省にて實測終了、翌年蘭人技師デレーケが計畫し明治二十年着工、大正元年竣工の河川改修の大工事(約一千萬圓)のため水平的に地形は變化があつた。曲線の輪中堤も直線となつた部分が多い。即ち第三圖の如く土地は減少して河底となつた。その面積三重縣側のみで九九八町歩、家屋その他移轉四五萬坪、そのため沿岸の聚落も耕地も河底となり、遠く海外に移住するものも出で人口は急に減少した。

其の後廢川は養魚地となり漸次耕地化されてゐる。而して人工の崖即防水堤の先には更に新しい三角洲面が造られ、木曾岬村では近く大規模の干拓をなし耕地三百町歩を得んとし、一方年々高まり行く河底のため三縣は聯合して更に改修を請願しつつある。

第四圖は地形の變遷を示したもの

第四圖　地形の變遷



(寶暦初年古図)　(天保元年古図)

(明治二十二年)改修前　(現代)

で、砂洲は(二)のほかは圖示されてゐない。(一)は寶曆治水前で(二)は寶曆治水後であるが、地形に大した變化はないが(三)に至つて餘程整頓されてゐる。(未完)

世界戰後の地名考（十）

瀧川規一

アジエガール(Ajaigarh)。中部印度に於けるブンデルカンド(Bundelkhand)の土人の一州。アラハバッド(Allahabad)の西南西一三〇哩の處にある。丘陵上に九世紀の要塞があり今日では廢墟となれるジャイナ(Jain耆那)教の殿堂があるにより州名となつてゐる。要塞の北の麓にはノーシャール(Naushahr)と稱するラジャ(rajah)の邸宅がある。面積八〇〇平方哩であり人口八萬七千餘。

アジヤンタ(Ajanta 又は Adjunta)。印度ハイデラバド(Hyderabad)にある村落及び谿谷。谿谷には紀元前二〇〇年より紀元前六〇〇年に亘る岩窟佛寺があり壁畫があるのが有名である。

アジメール(Ajmer)。印度ラジプタナ(Rajputana)のアジメール・メルワラ(Ajmer Merwara)と稱する英領の一州の首府。風景佳にして低地にあり鐵道によりアグラ(Agra)の西二二八哩の地點にある。タラガール山(Taragarh Hill)の麓にあり丘上にはアクバール(Akbar)によつて建てられた要塞がある。要塞を繞らすに城壁があり五つの門がある。美麗なるジャイナ